九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

黄表紙『新義経細見蝦夷』 : 翻刻と解題

園田, 豊

https://doi.org/10.15017/4755945

出版情報：雅俗. 1, pp.179-188, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：著作権保護のため論文中の図は非表示

KYUSHU UNIVERSITY

黄表紙『新義経細見蝦夷』――翻刻と解題――

園田　豊

《書誌解題》

書型　袋入り中本一巻一冊

装丁　改装。紙のこよりで他の黄表紙と合綴。但し、もと糸は残る。

表紙　原表紙（18・2×13・1センチ）。その上に袋を貼付してある。袋には、中央の双枠の中に題名が刷られており、赤地に黒文字で「新義経細見蝦夷」と外題。中央と右上隅に、江戸浅草と駒込富士神社の祭礼で売られた麦藁細工の蛇の画（黄色で着色）。笹の葉（緑で着色）。左右下隅には雲に富士山の画。

外題　袋に「新義経細見蝦夷」。読みは、天明五年春の『新吉原細見』巻末の「巳新板袋入壹冊物」広告に拠り「しんよしつねさいけんのゑぞ」。

丁数　全五丁。

柱記　「よしつね　一（〜五）」

刊年　記載なし。但し、前記『新吉原細見』巻末広告より、天明五年刊と思われる。

著者　五丁裏左端に「万象作　（まんじに象の遊印）」とあることから森羅万象＝万象亭森島中良。

画者　五丁裏右下隅に「まさのぶ画」。北尾政演＝山東京伝。

書肆　一丁表上部の山形に蔦の葉の商標から蔦屋重三郎。

本書は平戸市松浦史料博物館蔵。随筆『甲子夜話』で知られる平戸藩主松浦静山公の旧蔵書である。同館の『図書分類目録其二（旧松浦家蔵書）』には「草紙下品類」に分類され、「函乙7上／837の1」の番号が付された本箱に、約三百五十部の他の黄表紙とともに収められている。本書と共に合綴されるのは以下の作品。

①『鮹入道佃沖』（朋誠堂喜三二作　喜多川歌麿画）
②『昔々噺問屋』（恋川好町作　北尾政美画）
③『嘘皮初音鼓』（桜川杜芳作　千代女（歌麿）画）
④本書
⑤『八被般若角文字』（山東京伝作　北尾政演画）
⑥『俠中俠悪言鮫骨』（山東京伝作　北尾政演画）
⑦『大悲千禄本』（芝全交作　北尾政演画）
⑧『頼光邪魔入』（唐来参和作　北尾政演画）
⑨『売鉄鉋挑灯具羅』（竹杖為軽作　北尾政演画）
⑩『涎繰当字之清書（棚橋正博氏推定『黄表紙総覧　前編』六一四頁）』（恋川好町作　北尾政美画）

すなわち蔦屋の天明五年刊「巳新板袋入壹冊物」十六部の内の十部であり、しかも②④⑤⑥⑦⑧⑨には有難いことに袋が備わる。

その中にあって本書は、管見では小説年表類と島津久基氏『義経伝説と文学』（昭和十年）に書名が見えるのみで他に蔵される所を知らない。

また、T・スクリーチ氏「江戸の心のロンドン時計」（『江戸文学』7）に一部が引用されるのみである。よってここに影

印、翻刻することにした。

本書は『万象亭戯作濫觴』『即銅三百そうは虎の巻』『夫従以来記』（ともに天明四年刊）に続く森島中良の黄表紙第四作目である。題名は「新吉原細見之絵図」のもじりであることは勿論だが、この題名には、一丁表に記されるごとく「新吉原新宅のわたまし」の意が込められている。天明四年四月十六日、吉原水道尻京町辺から出火、五町残らず焼失、両国、浅草並木、三軒町、馬道辺に仮宅をして営業したという（『青楼年暦考』）。その後、新宅普請が成ったのである。このことからも本書の刊年は天明五年と考えてよかろう。それに加えて御伽草子『御曹司島渡』の趣向を取り入れた。一丁表の蝦夷が島渡り、一丁裏・二丁表の女護が島（ここに名の見える八百吉婦人以下は当時の女芸者であろう。）、二丁裏・三丁表の馬人島（『御曹司』では腰から上が馬で下が人、これを万象亭は逆にした。こちらの方が画にした際おかしみを増すからか。）などがそれである。

三丁裏・四丁表の穿胸国人、五丁裏の足長国人は『和漢三才図会』などにも見えるが、筆者には万象亭の戯作の師風来山人平賀源内の『風流志道軒伝』（宝暦十三年刊）が想起される。また、オランダの覗きからくりは山東京伝の『御存商売物』（天明二年刊）六丁表に描かれるところ。からくりを覗く唐子の「此覗きがらくりは近い頃の草双紙の様でどうもおいらにやあ面白くない。」いう台詞が奮っている。『金々先生』以来、「どうやらこうやら草双紙といかのぼりはおとなの物となつたるもおかし」（安永十年『菊寿草』）であった。

四丁裏・五丁表には黒坊と小人島が出てくる。南海の黒坊は赤い珊瑚樹採りを業とした。洒落本『婦美車紫鹿子』（安永三年刊）に御納戸茶郡内の小袖に下は白無垢を着た二十歳ばかりの柔和な坊主を「みさつしやいさんごじゆとりの黒ん坊をみるようた」と悪評する場面がある。また『江戸のおもかげ』（天保三年成か）には万象亭の弟子森羅亭万宝の「枝さん瑚珠に踊るくろ坊」の讃が付された扇を持って踊る黒坊の画が載っている。小人が鶴に乗って飛行する様は山東京伝の黄表紙『小人國毅櫻』（寛政五年刊）にも描かれるところである。

前述のごとく、天明五年は蔦屋から袋入り五丁一冊物が多く刊行された。袋入りの価格や出版形態については不明の点が

少なくないが、この五丁一冊物のどれにも共通する作品の性格として他愛のなさが指摘できよう。元来、黄表紙とはそうしたものであるが、中でも、これら袋入り一冊ものは全五丁という短さも手伝って、いかにも他愛ない。そして、この五丁一冊物に黄表紙の究極の姿を見るのはあながち間違いではないような気がする。安永四年の『金々先生栄花夢』に始まる黄表紙という文芸の成熟度が天明元年刊『菊寿草』、天明二年刊『岡目八目』という評判記が出たことと相まって上昇の気運をたどり、一つの頂点を迎えるのが、この天明三、四年である。そのことは小説年表類に記載される作品数からしても明らかであり、それまでは読者として楽しんでいた大田南畝や森島中良が自ら作者として参加せざるを得なくなる（無論より楽しむために）のがこの時期であることからも察せられる。その機会を把えての蔦屋の刊行であった。

南畝は、万象亭の黄表紙を評して「こらぬ思案の早つくり」という（天明五年刊『売鉄鉋挑灯具羅』序）。万象亭の速筆は天明六年十一月二十日、三十六丁の洒落本『福神粋語録』を一夜にして仕上げたことからも知られるところ。中良自身も「万が作はむだでいい。たわいのないの所が日本だと相変わらず御評判願ひ上げ奉ります」との口上を述べている（天明七年刊『色男其所此所』）。こうした中良にとって五丁一冊物はまさに自家薬籠中のものではなかったかと想像する。そう思って見れば、例えば喜三二の『鮪入道佃沖』が短い中に起承転結をつけようとして、やや中途半端に終わっている感があるのに対し、本作は始めから構成には無頓着で、そこに逆にシュールな面白さが浮かび上がっているような気がするが、そこまでいえば贔屓の引き倒しになるかもしれない。

最後に本書の紹介をお許し下さった松浦史料博物館に厚く御礼申し上げます。

著作権保護のため図は非表示

（袋・表紙）

（一オ）

著作権保護のため図は非表示

（一ウ・二オ）

（二ウ・三オ）

著作権保護のため図は非表示

（三ウ・四オ）

（四ウ・五オ）

著作権保護のため図は非表示

（五ウ）

（1オ）さても源よしつね公ハたかだちの城をずいとくじとあそバされ弁けい一人御ともにてしま〳〵をめぐらせ給ひつひニハ当はる新吉原新たくのわたましと同日ニえぞかしまへ御あしをつけられける

（義経）「此度のしうぎニいこく人ともニにはかをいひ付てよかろう」

（異国人）「江戸で文魚えぞでわたくしなそといつちやァいさくさハないのさ」

（弁慶）「わが君の御せんだぞあまりしやれまえぞ」

（1ウ・2オ）第一の御手ニしよくしたる天竺よりハ文珠ほさつの手がひのからしゝを奉りけれバ女ごの嶋の八百吉婦人おしつ婦人いつ梅婦人こます婦人しま冨婦人あさを婦人のこらず手こまへのミへにてしゝがしらの名入手長しまハさじきのまへどふりへ手をくミ合てけんぶつのふせきこれぞ手すりのはじめなり

女ごのしまハ男がなき故ふきながしの鯉のごとく南風ニふかれてぼてれんとはらむ也子どもハ風の子といふハこのいんゑん也此にわかのどさくさまきれいたづら風せうわる風しつぶかかせすけべいかせなんとりやうじニまゑへふきこミてゝなしごをはらむまいものでもなしとて風よけのふん

どしをする何やらにきんばくでハなくていろこニきんしぶさもありがてへ
（獅子）「女のてこまへたからへちや〳〵とや唐獅子〳〵じやかましいときこえたか」
「もしも山のきのてんからふいたるミなミかぜふいたらミもちニなるへいヨイ〳〵ヨイやナ」

（2ウ・3オ）丁昊国はこしから下が馬ゆゑ馬のおもひつきらくばするきづかひかなくてしめたものなり
此くにの男ばかりより合と豆一升がけにてたいこのたゝきくらその外の大ばさらハおはなしニなつたことでハないのさ
（烏帽子の男）「とつぱひんやろ〳〵じや〳〵馬〳〵すゞのおとゝ聞えるかきこえずハまたありさ荒神た（さカ）まのじや〳〵馬ドウ〳〵どうでごぜへす」
（真ん中の男）「かくと遊びニ大もじかきしゝのほらいりほらかへりとつたか見たか十六もんゑつ中とやまはんごんたんたゞの九文と十九もんアリヤ〳〵〳〵」
（左側の男）「ハイ人ハイうまとう〳〵〳〵」

（3ウ・4オ）むねニ穴のある穿胸國がならんでのぞきの穴になり中のゑハオランダのけん上ロンドンのとけいさいく人がじやり〳〵を引と一目国がぼんぼりから皃をだすのぞきてハから子なり

口上

さいしよごらんニ入まするハおいらんだこくちうさん王のおしろいのかまえやりて笠ぼこげんぢうニまんなかの見わたしニハすいどうのやぐら左右ニハごてさんおうさんふたつのやまたかわらひのあたしニつれかミはなのふり懸るけいしよくしつたかのみなとおゝすのさとお見たてニお目とまりますれバ夜ミせのていとかハりまするカラ〳〵の鈴ちやら〳〵のすがゝきニつれあんどうへハ火をてんじまする

さいく人
らくり
竹田

（穿胸国人）「アノがきハおれがミぞおちへあおつばなを付やアがつた」
（唐子1）「ぼうにもおミせ」「アゝくす〳〵」
（唐子2）「此のぞきがらくりハちかいころのくさぞうしのやうでとふもおいらにやアおもしろくない」

（4ウ・5オ）くろんぼうと小人じまハ人ぎやうしばゐの
思ひつきわしのだんといふ所なれど小人しま故つるのてん
とげだいをかへ当時さんごじゅがふつていニ付赤いづくし
をくろいつくしニこじつけたハいきなれどちと人形遣ひへ
ハぎん〳〵なり上るり
〳〵けふハいかなるあく日にて思ひもよらぬまなづるめニとら
れしわが子を取かへす思あんしてたべわかつまとワットさ
けびふしまろびなげく涙ハ雨だれをしゞみかいにてはかり
込小ぢよくへいるゝふぜいなりおんあいせつなるかなしミ
ニ五ざう六ぶもさんらんせしめ小人じまハたかわらひハヽヽヽ
ヽハアあれ〳〵そらニわが子のきるもの黒いハ〳〵くろい
ハむくろじかまだも黒いがこさります三十日さうじのはな
の下人ぎやう遣ひのくろやきかまだも黒いがこさりやすゆ
やのひきまどひえだんごたどんやおぢいが手のすぢかいき
ちよんでたちの通人かまだもくろいがございますめしたき
おんなのくびすじかまたもくろいかこさりますがどふもた
かくハ申されませぬ
（黒坊の人形遣い1）「あのミづひきを見てもぞつとつる
の」
（同　2）「これで目がくろいといひぶんハない」

（5ウ）あしながしまハあをのけニこけてまづ此さうしハ
これぎりどん〳〵
さくしやのひやうばん一さつものゝひやうばんうりだしハ
はやうござい
（足長国人。左腕に「一心命」の入れ墨あり）「うちだし
てしまつたらミんなきておこしてくんねへながあしッこハ
あやまるぜ」
（画面左端に）「万象作 [illegible]」
（右下隅に）　まさのぶ画